

縊死体

夢野久作

どこかの公園のベンチである。

眼の前には一条の噴水が、夕暮の青空高く高くあがっては落ち、あがっては落ちしている。

その噴水の音を聞きながら、私はいくつかの夕刊を拡げ散らしている。そうして、どの新聞を見ても、私が探している記事が見当たらないことがわかって、私はニツタリと冷笑しながら、ゴシャゴシャに重ねて押し丸めた。

私が探している記事というのは今から一箇月ばかり前、郊

外の或る空家の中で、私に絞め殺された可哀相な下町娘の死体に関する報道であつた。

私は、その娘と深い恋仲になつていたものであるが、或る夕方のこと、その娘が私に会いに来た時の桃割れと振袖姿が、あんまり美し過ぎたので、

私は息苦しさに堪えられなくなつて、彼女を郊外の××踏切り附近の離れ家に連れ込んだ。そうして驚き怪しんでいる娘を、イキナリ一思いに絞め殺して、やつと重荷を卸おろしたような気持ちになつたものである。

万一こうでもしなかったら、俺はキチガイになったかも知れないぞ……と思ひながら……。いぞ……。

それから私は、その娘の扱帯しとぎを解いて、部屋の鴨居かもいに引っかけて、縊死を遂げたように装わせておいた。そうして何喰わぬ顔をして下宿に帰ったものであるが、それ以来私は、毎日、朝と晩と二度ずつ、おきまりのようにこの公園に来て、このベンチに腰をかけて、入口で買って来た二三枚の朝刊や夕刊に眼を通すのが、一つの習慣になってしまった。

「振袖娘の縊死」

といったような標題を予期しながら……。そうして、そんな記事がどこにも発見されない事をたしかめると、その空家の上空に当る青い青い大気の色を見上げながら、ニヤリと一つ冷笑をするのが、やはり一つの習慣のようになってしまったのであった。

今もそうであつた。

私は二三枚の新聞紙をゴシヤゴシヤに丸めて、ベンチの下へ投げ込むと、バットを一本口に啣くわえなが

ら、その方向の曇った空を振り返った。そうして例の通りの冷笑を含みながらマツチを擦ろうとしたが、その時にフト足下に落ちている一枚の新聞紙が眼に付くと、私はハッと息を詰めた。

それはやはり同じ日付けの夕刊の社会面であつたが、誰かこのベンチに腰をかけた人が棄てて行つたものらしい。そのまん中の処に掲^だしてある特種らしい三段抜きの大きな記事が、私の眼に電気のように飛び付いて来た。

空家の怪死体

××踏切附近の廃屋の中で

死後約二ヶ月を経た半骸骨

会社員らしい若い背広男

私はこの新聞記事を攔むと、夢中で公園を飛び出した。そうしてどこをどうして来たものか、××踏切り附近の思ひ出深い廃家の前に来て、茫然と突っ立っていた。

私はやがて、片手に攔んだままの新聞紙に気が付くと、慌てて前後を見まわした。そうして誰も通っていないのを見

澄ますと、思い切って表の扉を開いて中に這入った。

空家の中は殆んど真暗であつた。その中を探り探り娘の死体を吊るしておいた奥の八畳の間へ来て、マッチを擦って

見ると……。

「……………」

……それは紛^{まご}う方ない私の死体であつた。
バンドを梁^{はり}に引っかけ、
バットを啣^{くは}えて、
右手にマッチを、
左手に新聞紙を纏^{まと}んで……。

私は驚きの余り気が遠く^はなつて来た。マッチの燃えさしを
取り落しながら……これは警察当局のトリックじゃないか
……といったような疑いをチラリと頭の片隅に浮かめかけた

ようであつたが、その瞬間に、
思ひもかけない私の背後のク
ラ暗やみの中から、若い女の笑い声が聞えて来た。
それは私が絞め殺した彼女の声に相違なかった。

「オホホホホホ……あたしの思いが、おわかりになつて
……」

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、
筑摩書房

1992(平成4)年8月24日第1刷発行

初出：「探偵クラブ」

1933(昭和8)年1月

入力：柴田卓治

校正：しず

2000年5月19日公開

2012年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、
青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)
で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、
ボランティアの皆さんです。